

記 事

例会記録

第 53 回日本医史学会神奈川地方会 秋季例会・
日本医史学会 合同例会

令和元年 9 月 28 日 (土)
鶴見大学会館

企画『戦中戦後の医療・看護体制を振り返る』

講演 I

衛生兵の語りから受け継ぐ歴史

——元衛生兵へのインタビューを通して——

順天堂大学医学部医史学研究室 鈴木紀子 先生

講演 II

第二次世界大戦におけるビルマ派遣日本赤十字社
救護看護婦の復員過程

日本赤十字看護大学 川原由佳里 先生

特別講演

沖縄で活躍した最後の医介輔：父の生涯を見つめて
社会医療法人敬愛会理事長 宮里善次 先生

日本医史学会 10 月例会

令和元年 10 月 26 日 (土)

順天堂大学御茶の水センタービル 6 階 601 教室

1. 結核予防協会と結核予防会

——医療と社会の転換期の視点から——

渡部幹夫

2. 「時に癒し、しばしば和め、常に慰む

——guerir quelquefois, soulager souvent, consoler
toujours」の出典について

森岡恭彦

日本医史学会 11 月例会

令和元年 11 月 16 日 (土)

順天堂大学センチュリータワー北 405

I 矢数医史学賞 受賞記念講演

1. 宇津木昆台とその『日本医譜』編纂

町泉寿郎

2. インターネット上でいかに医学古典文献資料
を使うか

小林健二

II 沖縄長寿説の成立と展開

——琉球政府第 1 回生命表と関連資料からの
分析——

逢見憲一

例会抄録

長谷川泰の再評価

殿崎 正明, 山本 鼎

長谷川泰の略歴

長谷川泰 (以下泰) は, 1842 (天保 13) 年 8 月,
新潟県長岡市福井町に生まれ, 幼名は太一 (多
一), 泰一郎, 泰と称し, 蘇山・蘇門同人・柳塘

などの号を用いた。泰は少年期 14 歳から 17 歳の
3 年間, 良寛と交流のあった長岡藩の儒者鈴木文
台の漢学塾「長善館」にて漢学を学び, 父宗済に
漢方医学を学んだ後, 一時長岡に帰藩していた鶴

殿春風（以下春風）に蘭学，英学，数学，天文学を学び，その縁で1862（文久2）年から下総国の佐倉順天堂で佐藤泰然，佐藤尚中に4年間和蘭医学を学び，オランダ語の他に英語，ドイツ語，フランス語等の訳述書を多く出版している。春風は，1831（天保2）年1月長岡藩世臣鶴殿長義（150石，物頭）の長子として生まれ，名は長養（ながやす），幼名幸八，通称団次郎，春風は号，1868（明治元）年12月9日没，享年37歳。1855（安政2）年24歳で江戸に行き，長州の蘭学者青木周弼の門人東條英庵と元長州藩士手塚律蔵に蘭学・英学を習う。その学は実学・経世を旨とし，長岡の友人としては小林虎三郎，河井継之助，川島億次郎，楨眞一，江戸では勝海舟，加藤弘之，榎本武揚，大鳥圭介，西郷隆盛，黒田了介，木戸孝允等と広く交流があった。春風は1862（文久2）年3月幕府の蕃所調所教授（数学）に就任した後，勝海舟の推挙で幕府目付役となり，1866・1867（慶應2・3）年，旗本川勝氏邸で蘭学を教える際にその従者的門人として江戸薩摩藩英学塾・幕府医学所で学んでいた泰は同室し，川勝光之輔（てるのすけ）（丹波守，維新時若年寄）と共に改めて蘭学を習い，その実力を究めていった。明治維新の時は長岡へ帰郷して河井継之助に抜擢され「三人扶持」の藩医として北越戊辰戦争に従軍する。その後，東京大学の前身である医学校・大学東校・第一大学区医学校の校長，長崎医学校校長を歴任する。そして1876（明治9）年4月西洋医の早期育成を目的とした日本医科大学の前身「済生学舎」を本郷元町に創立，1884（明治17）年12月から日本で初めて女子医学生を受け入れ，高橋瑞子（1852.10.24（嘉永5）-1927.2.28（昭和2）は済生学舎女医第1号（1887（明治20）年），女医免許第3号となり，17年余りの間に120余名が女医となった。1896（明治29）年5月30日レントゲン博士がX線発見後7ヶ月にして日本で初めてX線実験・臨床講義が済生学舎臨床講堂にて行われた際の助手を務めた丸茂文良の妻丸茂むね（1869（明治2）年9月1日-1944（昭和19）年9月8日，1889（明治22）年卒，日本で7番目の女医），東京女医学校（現在の東京女子医科大学）

を創設した吉岡弥生（1871（明治4）年3月10日）-1959年（昭和34）年5月22日，1892（明治25）年卒）等を輩出している。1887（明治20）年には薬学科を設置する。済生学舎の特徴は，ドイツの19世紀の「自由教育」，「学ぶ者の自由」，「教える者の自由」を旨とし，「済生救民」の思想を建学の精神として泰の演説は情熱的で学生達に学問・医療に対する使命感を十分に与え，1903（明治36）年9月に廃校するまでに9,000名以上の卒業生を輩出し，日本全体の西洋医師の半数以上を占め，明治期の国民医療を支えた。

その間，東京府病院院長・脚気病院院長・癲狂院院長・避病院院長・警視庁衛生部長等を歴任，衆議院議員を3期，内務省衛生局長にも就任する。衆議院議員としては，1891（明治24）年から明治25年にかけての衆議院予算委員会で「関西にも大学を造るべし。東京大学一校のみでは競風が失われる。」と提言し，政府は3年後に設立の準備に着手し，1897（明治30）年に京都帝国大学が設立される。2年後の医学部開設に当り，猪子止戈之助（いのこしかのすけ）病院長は予算不足を泰に訴え，泰は文部省に掛け合い，聖護院近くの2万坪を買収させ，医学部および付属病院を造らせた。また泰の衛生局長としての業績（明治31年3月-明治35年9月）としては，産婆規則（明治32年7月19日勅令第345号），汚物掃除法（明治33年3月7日法律第31号），下水道法（明治33年3月7日法律第32号），精神病患者監護法（明治33年3月10日法律第38号），ペスト菌取扱取締規則（明治34年12月25日内務省令第39号）等の整備が挙げられる。（『日本医事大鑑』昭和2年，p.74-87）また1893（明治26）年，東京帝国大学に伝染病研究所を設置するという文部省案に反対演説を行い廃案とする一方で，内務省所管の大日本私立衛生会伝染病研究所補助ニ付建議を衆議院に提出して予算を獲得し，芝区愛宕町に伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）を新設する際に芝区民からの猛烈な反対に対して，「伝染病研究所は市内に置くも妨げなし」という4・5時間にわたる大演説を行い，反対を撃破し設立に至らした。

以上見て来た様に長谷川泰は、1. 日本医科大学の前身済生学舎を創設して明治期の国民医療を支えた、2. 女子医学生教育に貢献、3. 伝染病研究所設立に貢献、4. 京都帝国大学創立の提唱、

等の業績から改めて評価されてしかるべきものと思われま

(令和元年6月例会)

書 評

坂井建雄 著

『図説 医学の歴史』

1966年インターン終了時に、評者はBettmannのA Pictorial History of Medicine (1962)を購入した。学生時代から続けてきた医学史研究の視野を日本から世界に広げるためであった。父の蔵書にGarrisonのAn Introduction to the History of Medicine (1929)を見つけたが、今一つ内容が分からない。もっと具体的に内容を理解出来ないかと考えた末に、丸善洋書部から教えられたのが上記の著書であった。これで評者の世界の医学史に対する理解が大いに進んだ。その後「図説」と冠する類書が出版される度にそれらに目を通してきたが、隔靴搔痒の感を禁じ得なかった。以来、日本語でこのような書冊が出版されないものかと考えてきた。今回、坂井建雄教授の『図説 医学の歴史』が出版され通覧する機会を得た。数十年渴望して止まなかった著書に漸く巡り逢えたと表現しても誇張ではない。

本書の概要を記すと、全26章からなる。第1部は「古代から近世初期までの医学」(9章)、第2部は「19世紀における近代医学への変革」(6章)、第3部は「20世紀からの近代医学の発展」(9章)、第4部は「医史学について」(2章)である。医学が20世紀から急速に発達して現在に至っていることを考慮すれば、第3部に26章中9章を割いていることは当然であろう。本書の大きな特徴の一つは第4部の「医史学について」である。医学史の研究者は、第25章「医史学の歴史」、第26章「現代における医史学の課題」の2章を熟

読する必要がある。この2章に著者の強いメッセージが込められているからである。インターネットの普及などによって易揮発性の情報が氾濫し、医史学研究者の中でさえ、自分が何を研究しているのかさえ覚束ない人、研究のための研究をしている人が間々見られる。少なくとも自己の立ち位置を再確認するために上記の2章を精読すべきであろう。

本書執筆に際して坂井教授はいくつもの険しい障壁を克服されたはずである。評者も二、三の著書を上梓した経験があるので、その困難さを多少は理解している。それらについて記すことは本書の評価にも関連するので述べて見たい。

第1は総論を書くことの難しさである。自分が専攻する狭い分野の史的発展を総論的に書くだけでも多大な労力を費やす。坂井教授は古代から現代にいたる西欧と東洋の文献を博搜して過不足なく記述していることは驚異的であり、至難の業である。評者自身、専攻科目の歴史については多少の自信はある。しかし、専攻科目以外の歴史となると心許ない。資料を読むことは出来ても十分に理解できない。しかし、坂井教授は二次文献ではなく、広い分野の一次文献を能く咀嚼・消化してその要点を我々に伝えている点はうれしい限りである。同様な記述を他書で読んできたが、多くは外国の研究者の請け売りであった。

第2は現代を記述する困難さである。「古今東西」というが、一見簡単に見えて難しいのが「今」